

目黒寄生虫館月報

昭和35年4月10日発行・毎月1回10日発行

第14号

昭和35年4月

寄生原虫類の標本の供覧

松林久吉

広く寄生虫と云えば、吸虫類、条虫類、線虫類等の蠕虫類の外に、原虫類、昆虫類、だに類などが含まれている。この中で原虫類と云われるものは、1個の細胞が1個体をなしている所謂単細胞動物であり、一般に顕微鏡でなければ見ることの出来ないものである。これら原虫類の標本を集めておいても、大勢の人々に供覧しようとなると仲々容易なことではない。一人一人顕微鏡をのぞくことに多くの時間

がかかるし、又のぞいて見ても、視野の中のどれが目的とする原虫であるのかも、初めて見る人には見当がつかない。従って、原虫類を人に供覧しようとする場合には写真を用いるのが最も効果的であるように思う。即ち、赤痢アメーバ及びそれが組織の中に侵入している顕微鏡写真を用意し、それとらべて、アメーバに侵された腸壁或は肝臓の臓器標本を置くと云うが如きである。(慶大教授)

団体参観

3月1日不動小学校理科研究会員30名が養護教諭西尾香代氏他1名に引率されて参観。

山下次郎教授来訪

3月5日北大山下教授来館種々有益な助言を与えられた。

町田保健所長来館

3月8日町田保健所長小野田孝義氏来訪館内を参観された。

山階鳥研黒田博士来訪

3月10日山階鳥類研究所黒田長久博士来訪、館長の案内で館内を参観され尚鳥類寄生虫につき取調方お話があった。

文献寄贈

下記の通り各方面から寄贈を受けた。

安藤亮博士から……マンソン裂頭条虫の研究1篇、肺吸虫第一中間宿主決定の地の写真1葉

九大宮崎一郎教授から……サナダムシの幼虫によるおこる4種の病気1篇

町田保健所長小野田孝義氏から……蛍光顕微鏡法による寄生虫卵の検出について他3篇

日本動物園水族館協会から……動物園水族館雑誌 Vol. 1. No. 1. 1959

オリオン社から……当館ツツガ虫、シナハマダラカ、イエカ、ノミ、シラミ、肝吸虫、肺吸虫蠟製模型の写真

下関水族館岡本仁氏氏から……鹹水性白点病について1篇

厚生省斎藤勇一氏から……A Brief Report on Public Health Administration in Japan 他3篇

文芸春秋社から……当館臘製模型写真2葉

杏林書院から……保健の科学2, 3月号

阪大微研森下薫博士から……日本における寄生虫学の黎明期と Beal 及び Scheube の貢献他16篇

宮城県衛生研究所湯田和郎氏から……寄生虫卵検査のためのKY塗抹液について1篇

標本及び解剖材料の寄贈

山階鳥類研究所黒田長久氏から……ムクドリ8羽及びその寄生虫5点

小倉暁雄氏から……クロベンケイガ=7匹
江の島マリランド中島将行氏から……イルカ及び鯨の寄生虫17点

宇賀氏から……メバル、ウミタナゴ等10尾

短 信

3月2日館長、日本テレビの春夏秋冬「腹の虫」に出演。

3月27日木原、標本の寄贈を受けるためマリランドに行く。

3月28日ガラバゴス島の鳥類、魚類、ウミトカゲ等の内臓多数を貰受け解剖した。

生物学同好会

3月14日開催杉靖三郎教授の第3講は欠講のため、次回(4月18日の予定)目黒寄生虫館亀谷了博士の「日本に於ける寄生虫による風土病について」興味あるお話を聞く。

前期の福井先生の生物学講義録は、目黒区教育委員会の援助により印刷完了も間近い。ご期待をこう。

参観者数の増加

このほど34年度の参観者数がまとまった。29年に一般に公開してから毎年参観者数は増加しているが、その変動を比較すると次の通りである。

29年度は1日平均	8名
30	8
31	11
32	19
33	30
34	45

特別展示パラサイト

『日本における風土病的寄生虫症の分布』四月より日本住血吸虫、肺吸虫、肝吸虫、エキノコックス、フィラリア、顎口虫の六種についてその分布を電燈の点滅により、一見して判るよう展示した。

魚類の寄生虫

木原 緑

いよいよ行楽のシーズンを迎え、これからは釣、地引網、洲立てと海や河の魚に接する機会も多くなることと思う。淡水産の魚を生食すること広節裂頭条虫やジストマの感染率が高く、非常に危険なのはいうまでもない。折角の楽しみを、後で悔いることがないようにしたい。とれた魚を料理する際にも一寸気をつけてみると意外に面白い寄生虫がついていることがしばしばある。今回は本館に保存されている数多くの魚類の寄生虫の中で特に同定の済んだものについて簡単に記してみた。

学名の不完全なものについては後日、本館刊行の寄生虫標本目録で整備するつもりである。尚これらの標本を寄贈又は同定して下さい。北大山下教授、九大宮崎教授、東大末広教授、桑原氏、水産大保科教授、福井博士に厚く御礼を申し上げます。 N: 線虫類, T: 吸虫類, C: 条虫類, A: 鉤頭虫類, Cr: 甲殻類

宿主の和名	宿主の学名	寄生部位	寄生虫の学名	分類
カツオ	<i>Katsuwonus Pelamis</i> (LINNAEUS)	鰓, 口腔	<i>Caligus bonito</i> WILSON, 1905	Cr
"	"	"	<i>Caligus katsuo</i> YAMAGUTI, 1936	"
"	"	腸	<i>Rhadinorhynchus katsuwonis</i> HARADA, 1928	A
"	"	"	<i>Anisakis</i> sp.	N
"	"	肝臓	<i>Tentacularia coryphaenae</i> BOSC, 1802	C
"	"	鰓	<i>Lobatozoum multisacculatum</i> ISHII, 1935	T
カマスサワラ	<i>Acanthocybium solandri</i> (CUVIER)	胃	<i>Hirudinella beebei</i> CHANDLER, 1937	T
サバ	<i>Pneumatophorus</i> sp.	腸胃	<i>Anisakis</i> sp.	N
"	"	"	<i>Lecithocladium excisum</i> (RUD., 1819) LÜHE, 1901	T
ブリ	<i>Seriola quinqueradiata</i> TEMM. et SCHL.	口腔	<i>Dinurus scombri</i> YAMAGUTI, 1934	Cr
ハマチ	"	外部	<i>Benedenia seriolae</i> YAMAGUTI,	T
ブリ	"	鰓	<i>Axine seriola</i> ISHII,	T
ワラサ	"	不明	<i>Philometroides seriolae</i> (ISHII, 1931)	N
ニジマス	<i>Salmo gairdneri iricleus</i> GIBBONS	盲腸	<i>Metabronema salmonicola</i> (ISHII, 1916)	N
ギンマス	<i>Oncorhynchus kisutch</i> (WALBAUM)	鰓	<i>Cysticola salmonicola</i> (ISHII, 1916)	N
ワカサギ	<i>Hypomesus olidus</i> (PALLAS)	盲腸	<i>Contracaecum</i> sp.	N
コイ	<i>Cyprinus carpio</i> (LINNAEUS)	鰓	<i>Lernaea cyprinacea</i> LINNE, 1758	Cr
イボダイ	<i>Psenopsis anomala</i> TEMM. et SCHL.	腸	<i>Echinophallus japonicus</i> YAMAGUTI, (1934)	C
オコゼ	<i>Inimicus japonicus</i> CUV. et VALEN.	"	<i>Filisoma japonicum</i> FUKUI et MORISHITA, 1936	A
"	"	不明	<i>Contracaecum</i> sp.	N
"	"	"	<i>Amphicaecum</i> sp.	N
サンマ	<i>Cololabis saira</i> BREVOORT	腸	<i>Prosorhynchus</i> sp. <i>Rhadinorhynchus selkirki</i> VAN CLEAVE, 1920	T A
"	"	鰓	<i>Bomolochus</i> sp.	Cr
クサフグ	<i>Spheroides niphobles</i> JORDAN et SNYDER	腸	<i>Arhythmacanthus fusiformis</i> YAMAGUTI, 1934	A
ヒガンフグ	<i>Spheroides pardalis</i> TEMM. et SCHL.	背びれ	<i>Argulus</i> sp.	Cr
キタマクラ	<i>Canthigaster livulata</i> TEMM. et SCHL.	鰓	<i>Taeniacanthidae</i>	Cr
ハマダイ	<i>Etelis evurus</i> JORDAN et EVERMANN	"	<i>Epibdella sebastodis</i> YAMAGUTI, 1933	T
"	"	"	<i>Epibdella seriolae</i> YAMAGUTI, 1933	T
"	"	"	<i>Microcotyle pomato</i> GOTO, 1894	T
キンメダイ	<i>Beryx splendens</i> LOWE	"	<i>Microcotyle ditrematis</i> YAMAGUTI, 1941	T
アオダイ	<i>Paracaesio caeruleus</i> (KATAYAMA)	鰓	<i>Lernanthropus</i> sp.	Cr
メダイ	<i>Mupus japonicus</i> (DÖDERLEIN)	"	"	"
コショウダイ	<i>Plectorhynchus cinctus</i> TEMM. et SCHL.	"	"	"

カガミダイ	Zenopsis nebulosa (TEMM. et SCHL.)	口 腔	Chondracanthus distortus WILSON, 1922	〃
マダイ	Chrysophrys major TEMM. et SCHL.	〃	Meinertia oxylinchaena (KOELBEL)	〃
アコウ	Sebastodes matsubarae HILGENDOLF	鰓	Naobranchia sp.	Cr
クエ	Epinephelus moara TEMM. et SCHL.	〃 鰓	Chondracanthus sp. Epibdella sebastodis YAMAGUTI, 1933	〃 T
サヨリ	Hemirhamphus sajori TEMM. et SCHL.	口 腔	Meinertia oxylinchaena (KOELBEL)	Cr
ドジョウ	Misgurnus fossilis LINNÉ	胃	Philometra sp.	N
スズキ	Lateolabrax japonicus (CUVIER)	胃	Contracecum sp.	N
クロアナゴ	Conger japonicus BLEEKER	胃	Sterrhurus pacificus YAMAGUTI, 1942	T
コチ	Platycephalus indicus LINNÉ	不 口 明	Nybelinia sp.	C
マグロ	Thunnus thynnus orientalis (TEMM. et SCHL.)	不 口 鰓	Acanthochondria sp. Hexacotyle grossa GOTO,	Cr T
サケ	Oncorhynchus keta (WALBAUM)	幽 門 垂	Phylobothrium sp.	C
カレイ sp.	Limanda sp.	鰓	Lernaepodidae	Cr
ヒラメ	Paralichthys olivaceus (TEMM. et SCHL.)	体 表	Lepeophtheirus sp.	Cr
タラ	Gadus macrocephalus TILESIIUS	腸	Echinorhynchus gadi	A
ヌメリゴチ	Callionymus lunatus TEMM. et SCHL.	眼	Phrioxcephalus sp.	Cr
ウルメイワシ	Etrumeus micropus TEMM. et SCHL.	不 明	Rhaphidascaris larvae	N
マンボウ	Mola mola (LINNÉ)	〃	Pennella orthagorisci WRIGHT	Cr
シロギス	Sillago japonica TEMM. et SCHL.	〃 鰓	Acanthochondria sp.	Cr
ハマモ	Muraenesox cinereus (FORSKÅL)	〃	Pseudocongericola chefoonensis YU, 1933	Cr
イナ	Mugil cephalus LINNAEUS	〃	Lernanthropus shishidoi SHIINO, 1955	Cr
ウナギ	Anguilla japonica TEMM. et SCHL.	鰓	Anguillicola globiceps YAMAGUTI,	N
キンギョ	Carassius auratus (LINNÉ)	不 明	Argulus japonicus THIELE, Lernaea elegans LEIGH-SCHARPE,	Cr Cr
〃	Pla Shado (バンコック)	肝	Gnathostoma spinigerum(LARVE)	N
	Pla Chalad (バンコック)	不 明	Notopterrus notopterus(PALLAS)	N

ニューオルリンス通信⑦

大島 智 夫

私は自分の研究の合間にできるだけ寄生虫学関係のコースをとる事にしています。ビーバー教授のヘルミンスとイエーガー教授の原虫学はすでに終わりました。原虫学の最後の試験は筆答二時間問題は「昆虫によって媒介される原虫疾患につき、昆虫および人体内における原虫の発育様式に従って分類説明せよ」その他一題、実地が一時間半これは三十数台の顕微鏡がならべてありそこに用意されたプレパラートを見ながら問題に答えるのです。例えば「これは南米の農夫の上膊の潰瘍の組織切片である、病原体と思はれるものが見えたら同定せよ」というようなものです。どうやら及第はしましたが日本の寄生虫学の教育が他人の教科書の口うつしと虫卵実習位ですまされているのが残念に思えてなりません。絶えず良いプレパラートを見て眼を訓練する必要は大いにあります。その意味で日に二三回、ビーバー教授から標本が教室員にわたされ廻覧され、これを何と同定するか如何に説明するか解答を

求められるのは極めて良い訓練になりますその答と討議はセミナーの時には行はれます。先日は人肺中の犬糸状虫のクロスセクションがだされました。一人だけ同定できたのがいて他は誰れもわかりませんでした。組織切片中の寄生虫の同定は極めて必要でありながら豊富な知識と経験を必要とするためアメリカでもビーバー教授の教室以外よくこれをこなせる所はないようです。そこで全米から不明な寄生虫と思はれるものを含む組織切片が送られてきます。このうち興味あるものは教室員に廻覧されて意見を求められるのです。時にはビーバー教授も「私にもよくわからない、誰かよい意見はないか」と聞かれます。

日本では研究機関でも大学でも一つの狭い分野の専門家になるにいがしく広い視野と知識をもった研究者を養成するに余りに僅かの努力しかなされていません。ドリルは必要であります。回虫は良く知っているが糸虫は全然知らないというのでは寄生虫学者として通用しません。昆虫学も最低の知識は絶対に必要であります。次便で私が今参加しているミラー教授の医用昆虫学の講義・実習の内容をお知らせします。